

## 巻頭言

### 夢

### Dream

近藤 和雄

KONDO Kazuo

未来を語ることは楽しい。夢がある。21世紀には癌やエイズの治療法が確立する。痴呆の予防法が確立する。不老不死の薬ができる。医学の領域で1990年代の前半、ある種の期待も込められて語られた話である。しかしながら、残念なことに、これらはいずれも今だに実現していない。いくら遺伝子レベルの研究が進んでも、科学の世界の奥は深いと思う。

こうしたなかで、考えてみると医療の現場で、目に見える形で着実に進歩している分野がある。工学系の分野である。注射器を初め、私達が点滴と呼んでいる静脈から水分や薬剤を投与する方法などの初歩的な治療から、手術室における術野を拡げる拡大顕微鏡に代表される器具の開発、さらには、診断に用いられるCTスキャン、核磁気共鳴、超音波断層検査など20世紀の後半の医療器具の著しい進歩は、工学の分野が土台となって発展してきている例は多い。こうなってくると、遺伝子レベルで夢を語るよりも、片手、片足が麻痺した時に麻痺した部位を用具で補うことを夢見た方がある意味で現実的である可能性もある。寝たきりのお年寄りの世話を全てロボットにしてもらうことなどは極めて近い将来可能なのではないか。実際的でもある。

こう考えてくると、昔内視鏡室で、内視鏡はカプセル化されるのではないかという思いが頭を横切ったことを思い出す。古くて太い内視鏡から新しく細い内視鏡の並んでいるのを眺めていると、患者さんに苦痛を与えないこともあわせてカプセルにしたらどんなに良いだろうかという思いは、今でも断ち切ることはできない。実際、もう開発は可能なのではないか。ヨーロッパから内視鏡のカプセル化に成功したとのニュースを聞くとこの思いはさらに強くなる。

現在考えている夢の一つは、デジタルカメラを用いた食べ物の栄養計算である。これから食べようとする食べ物をデジタルカメラに取り込むと瞬時にカロリー、脂肪量など主要な栄養素を表示し、必要な人には、とりすぎの注意もさせようとするものである。最も、この話一人ではできない。コンピューターに強い強力な助っ人を必要とする。

こうして夢を見てくると、夢の実現にはなるべく多くの人々と仲良くすることではないか。しかも自分の専門外のなるべく他分野の人々と交流することの重要性を教えてくれているように思える。

しかし、この話を栄養士さんにするとみな一様に自分の仕事を取られると思うからか嫌な顔をする。栄養士本来の仕事は、栄養計算の先と思うが、現実には難しい。

(生活環境研究センター長)